

う つ や ま
宇都山くんは
あくまで救世主②

あくま ゆうわく
イケメン悪魔に誘惑されています!?

あいば
相葉すずか・作
の ゆ
Noyu・絵



アルファポリスきずな文庫

岸里由衣 ▶

鈴香の友だち。
恋バナとイケメンが大好き！



志葉咲良

運動神経のいいクラスメイト。
歯がとがっているみたい……？



宇都山遊人 ▶

中2の蓮人の兄。生徒会長と仲良し。



如月ノア

星ノ丘学園中等部の生徒会長。
どこかあやしいみりよくがある。



志葉賢人 ▶

咲良の兄。
不良っぽいけど実はやさしい。



クールなクラスメイト。

ちょっとこわいけど、
鈴香を助けてくれる悪魔！？

▽宇都山蓮人



▲穂村凧

さわやかな転校生。
本当の姿は鈴香を
ねらう死神！？



結城鈴香

手芸が趣味の中学1年生。
人に注目されるのが苦手。



人物紹介

もくじ

17	球技大会当日！	205
16	いっしょじゃないよ	197
15	宇都山くんとけんぞく	188
14	穂村くんの思いと、宇都山くんのたくらみ	171
13	咲良ちゃんのお兄さん	149
12	宇都山くんとはケンカ中です	138
11	穂村くんの『好き』	125
10	ふたりの約束	112
9	図書室での出会い	98
8	体育の時間に乱入者	86
7	球技大会のペア	76
6	穂村くんが、わたしを好きっ!?	68
5	宇都山くんのお兄さん	53
4	宇都山くんは小悪魔	45
3	如月先ばいとナイシヨのおしゃべり	36
2	わたしは、特別ななかじゃない	21
1	宇都山くんと穂村くんの秘密	6

あとがき

224



1・宇都山くんと穂村くんの秘密

「鈴香ちゃん、おはよ」

「ゴールデンウィークが終わった最初の登校日、昇降口で上ぐつをはきかえていたら、ポンツと肩をたたかれた。」

振り返ると、ふわふわした長い髪をヘアバンドで押さえて、おでこを出した丸メガネの女の子が手をヒラヒラさせている。

となりのクラスの岸里由衣ちゃんだ。

「由衣ちゃん、おはよう」

わたしも笑顔で、朝のあいさつをした。

わたしの名前は、結城鈴香。

昔は天文台があった高台に建つ、星の丘学園の中等部の一年生。

趣味は、読書と手芸。あとお菓子を作ったりするのもけっこう好き。

性格は、ちよつと人見知りかな。仲よくなつた子とは普通に話せるんだけど、仲よくない子とはきんちようしてうまく話せなくなる。

あと、注目されるのが苦手。注目されると、ここ一番っていう大事な時に失敗しちゃう。

そういう性格だから、時々「積極性に欠ける」って言われちゃうこともある。

チャームポイントって言うほどじゃないかもだけど、腰まであるサラサラのストレートの髪を、いつもポニーテールにしている。

由衣ちゃんはわたしのことを目が大きくて、美少女だって言ってくれるけど、そんなことはないと思う。

わたしがぬいだくつをげた箱にしまっていると、由衣ちゃんがカバンから何かを取り出した。

「はい。これ」

由衣ちゃんはわたしに、小さな紙ぶくろを差し出す。

「？」

なんだろうって思っていたら、由衣ちゃんが「おみやげだよ」って教えてくれた。

「家族で旅行に行ったから、そのおみやげ」

「ありがとう」

お礼を言つて紙ぶくろを受け取つたわたしに、由衣ちゃんが聞く。

「鈴香ちゃんは、お休みの間にどこか行つた？」

「えつとね……」

お休みの間に、わたしはお父さんとお母さんといつしよに、二年前に病気で亡くなった彩香ちゃんのお墓参りに行つてきた。彩香ちゃんっていうのは、二歳年上のわたしのお姉ちゃん。

なかよしで大好きだった彩香ちゃんが死んじやつたつて言葉にするのがイヤで、わたしはまだ由衣ちゃんにそのことを話せないでいる。

でもひとりだけ、同じクラスの男の子に、彩香ちゃんのことを話したことがある。

その子は、わたしにとって特別な存在で、名前を……

「あ、宇都山くん。おはよう」

声はずませた由衣ちゃんが、また手をヒラヒラさせた。

わたしの心を読んだみたいなたいミングで出てきた名前におどろいて振り向くと、すぐ後ろに少しくせのある黒髪の男の子が立っていた。

スッキリした鼻筋に、切れ長の目、うすいくちびるに、とがったあご。顔のパーツがどれも

とてもきれいな形をしている上に、その全部が絶妙なバランスで配置されているイケメンな男の子の名前は、宇都山蓮斗くん。

わたしと同じクラスの男の子で、わたしが、彩香ちゃんのことを話した相手。

わたしにとつて、宇都山くんはいろんな意味で特別な存在で、宇都山くんもわたしのこと、

特別だつて言つてくれている。

だつて宇都山くんは、わたしの救世主なんかも。

「ねえ、宇都山くんはお休みの間にどこか行つた？」

由衣ちゃんは宇都山くんに、わたしにしたのと同じ質問をする。

ぬいだ革ぐつをげた箱にしまっていた宇都山くんは、こちらをチラリと見て、「さあ」つて

ふぎげんそうに言つた。

宇都山くんにギロリとにらまれて、わたしはドキツとした。

今の宇都山くんはわたしと同じこげ茶色の瞳をしているけど、わたしはその瞳が赤く輝くのを知っているから。

瞳が赤く光る……なんて、普通はありえないけど、実は宇都山くんは悪魔なんだ。

信じられないかもしれないけど、ウソじゃないよ。

だつてわたしは、宇都山くんの瞳が溶岩みたいにも赤く光るところや、ふしぎな力を使うところを何回も見ているもん。

そして宇都山くんは、そのふしぎな力で、わたしのことを守ってくれている。何から守ってくれているかというところ……

「穂村くん、おはよう」

由衣ちゃんが見ている方を見ると、ひとふさだけ長い髪をたばねた男の子が立っていた。

宇都山くんとはちがう雰囲気イケメン男子。

同じクラスで穂村風くんだ。

「結城さん、岸里さん、おはよう」

穂村くんが、さわやかに笑う。

「朝からふたりに会えるなんて、今日はいい日だね」

由衣ちゃんが、小さな声で言う。

恋愛マンガとイケメンアイドルが大好きな由衣ちゃんは、朝からかつこいいふたりに会えて

喜んでいる。

でも宇都山くんはちがうみたい。

ジロリと穂村くんをにらんで、小さくあかンべをする。

「あれ？ 宇都山くんもいたんだ」

穂村くんは、今初めて宇都山くんに気がついたみたいな顔で言う。そして横を向いて、由衣

ちゃんに気づかれないよう宇都山くんにあかンべをやり返す。

宇都山くんと穂村くんはすごく仲が悪い。

穂村くんにあかンべをされて、宇都山くんは意地の悪い顔をする。

「なんだ、またオレに泣かされたのか？」

「泣いてないしっ！」

穂村くんがおこった顔で言い返すけど、宇都

山くんは気にしない。ニヤリと笑って言う。

「そうだった。泣かされる前に、結城さんに

泣かされたら泣かされる前に、結城さんに

泣かされたら泣かされる前に、結城さんに

泣かされたら泣かされる前に、結城さんに



守ってもらったんだつたよな」

言葉にはしないけど、宇都山くんの目は『なさけないヤツ』って言っている。

「あれは、僕がたのんだことじゃない」

「礼も言わずに、えらそうだな……」

宇都山くんの瞳の奥に、かすかな赤い光がゆれた。

ほんの一瞬だけだったから、由衣ちゃんは気づいていないみたいだけど、宇都山くんの正体を知られたら大変。

「う、宇都山くんっ」

あわててふたりの会話を止めようとしたら、わたしのポケットから何かがコロんと落ちた。

羊毛フェルトでできているハリネズミのマスコットのミウが、穂村くんの方へと転がっていく。

「うわっ」

ミウが転がってくると、穂村くんはあわてて後ろに飛びのいた。

穂村くんがあまりにビックリしたから、それにつられて由衣ちゃんも目を丸くする。でもすぐに、しゃがみこんでミウをひろってくれた。

「鈴香ちゃん、落ちたよ」

「ありがとう」

わたしは由衣ちゃんからミウを受け取ると、いい子いい子つて背中をなでてあげた。

それを見て、穂村くんはせきばらいをして宇都山くんをにらんだ。

「と、とにかく僕は、結城さんのことをあきらめてないからっ！」

それだけ言うと、穂村くんは早足に行ってしまった。

あ、やつぱりあきらめてないんだ……

なんとも言えない気持ちで穂村くんの背中を見送っていると、由衣ちゃんにとつぜん肩をかまれた。

「鈴香ちゃん、さっきの穂村くんの言葉、何？ 愛の告白？」

目をキラキラかがやかせた由衣ちゃんが、わたしをぶんぶんゆさぶる。

恋バナや少女マンガが大好きな由衣ちゃんは、何かかんちがいをしているみたいだけど、さっきのはそういう意味じゃない。

だって穂村くんの正体は、死神なんだもん。

しかも、爆発事故で死んじゃうはずだったわたしの魂をむかえにきた死神。

偶然そのことを知った悪魔の宇都山くんが助けてくれたからわたしはまだ死んでないけど、穂村くんはわたしの魂を回収することをあきらめてないんだって。

ただ、穂村くんより宇都山くんの方が強いから、そう簡単にはいかないみたい。

「あれは……そういうんじゃないよ。えつと……なんて言うか……」

由衣ちゃんに肩をガクガクゆらされながら、どう説明しようかなって考えていたら、宇都山くんが由衣ちゃんに声をかけた。

「岸里さんは、休みの間にどこか行ったの？」

クールで無口な宇都山くんに話しかけられて、由衣ちゃんはうれしそうにそつちを見た。

「えつ！ 宇都山くん、わたしの話を聞きたいの？ 実ほね……」

ポイツとわたしから手をはなした由衣ちゃんは、両手を組んで宇都山くんに歩みよる。

宇都山くんはそのいきおいにおどろいて少し後ずさるけど、由衣ちゃんは気にしていない。

そのまま目をかがやかせて話し続けようとする。

「とりあえず、教室に行こう。カバンを置いてから聞かせて」

ふだんだれとも話さない宇都山くんにしてはめずらしいセリフだ。

きつと、わたしを助けるために言ってくれたんだよね。

クールで冷たいように見えて、宇都山くんはすごく優しいから。

「じゃあ、早く教室に行こう」

由衣ちゃんは、声ははずませて教室へとかけていく。

わたしはポケットに戻す前に、もう一度ミウの背中をなでた。

するとミウがうれしそうに鼻をヒクヒクさせる。

ミウは他の人の前ではただのマスコットのふりをしているけど、宇都山くんが魂を吹きこんだ使い魔で、わたしを穂村くんから守ってくれているんだ。

だからミウをつれていれば、大丈夫。それはわかっただけで、本当に殺されそうになつたことがあるから……

「穂村くんといつしよにいと、ドキドキしちゃうよね」

ミウにそう話しかけてポケットにしまったわたしは、顔を上げてビククリした。

だって宇都山くんが、こわい顔をしてわたしを見ているんだもん。

「結城さん、それどういうこと？」

いつも以上にふぎげんそうな顔で宇都山くんが言う。

さつきミウに話しかけていたのを、聞かれちゃったみたい。

たしかに今のセリフは、わたしを守ってくれている宇都山くんに失礼だよね。
「えつと、ごめんね」

わたしがすなおにあやまると、宇都山くんは「別に、そんなんじゃないからいいけど」って、そつぽをむいて教室に行っちゃった。

教室に入ってから朝のじゅんびをしていたら、すぐに由衣ちゃんが宇都山くんの席に遊びにきた。
「宇都山くん、おまたせ。さっきの話の続きなんだけどね……」

元氣よく宇都山くんに話しかける由衣ちゃんが、キョロキョロと教室を見わたす。

そしてわたしと目が合うと、大きく手をふる。

「鈴香ちゃん！ 鈴香ちゃんも宇都山くんの話を聞くでしょ」

「ゆ、由衣ちゃん……」

大きな声で名前をよばれて、目立つのが苦手なわたしはあわてた。

転校生の穂村くん以外は、名簿の順番で席が決められていて、『あ行』の宇都山くんは廊下側の列で、『や行』のわたしは窓際にすわっている。

そんなはなれた席から大きな声でわたしをよぶから、クラスの子がみんなわたしを見ている

の。

クラスで一番目立つグループの間宮さんなんて、見ているっていうより、にらんでいる感じ。そんな間宮さんと目が合つて、わたしは首をすくめた。

「鈴香ちゃんってば！」

わたしが動かないのにじれた由衣ちゃんが、さつきよりも大きな声を出す。

「今行く」

また名前をよばれたら恥ずかしい。

わたしはあわてて立ち上がった。

そのままいそいで宇都山くんたちの所に行こうとしたら、通路に飛び出していただれかのカバンに足を引っかけた。

「あつ」

小さな声を上げた時には、わたしの体は前にたおれていた。

このまま床にぶつかると！

そう思って、腕で顔をおおって強く目をつぶる。

だけどわたしの体は床にぶつからずに、ちゅうとはんばな角度で動きを止めた。



「え？」

どういうことだろうと思つて目を開けて顔を上げると、大きな目をしたボブカットの女の子がわたしを見下ろしていた。

ボブカットの髪はかたそうで、ところどころはねている。同じクラスの志葉咲良さんだ。

「結城さん、だいじょうぶ？」

そう言いながら志葉さんがゆつくり手をはなすと、ひざが床についた。

近くにいた志葉さんが両腕で転びそうになったわたしの腰を抱きとめてくれたみたい。

志葉さんの方がわたしより身長が低いのに、すごく力持ち。

「志葉さん、ありがとう」

立ち上がったわたしがお礼を言うと、志葉さんは「気をつけてね」って言つて教室を出ていく。

「鈴香ちゃん、UFOキャッチャーのぬいぐるみみたいになつてたよ」

宇都山くんの席に行くとき、由衣ちゃんがそう言つて笑つた。

たしかに似てるかも……

さつき、志葉さんに腰を抱きかかえられてぶらーんとなつてた自分の姿を思い出すと、顔が

熱くなる。

顔の熱をさましたくてほつぺたをべちべちたたいていたら、宇都山くんと目が合った。

「結城さん、本当にいつもあぶなっかしいよな」

「う……っ」

本当はそんなことないのに。

でも宇都山くんには、何度もあぶないところを助けてもらっているから言い返せない。

むつとしてだまつていると、宇都山くんが由衣ちゃんには聞こえないくらい小さな声でポツ

リと言う。

「だから、目はなせないんだけど」

そんなことを言われたら、なんだかドキツとしちやう。

2・わたしは、特別なんかじゃない

「そろそろおたがいの顔もおぼえただろうから、席がえをするか」

その日のホームルームの時間、担任の生島先生がそんなことを言いだした。

入学式から一ヶ月、たしかにもうみんなクラスメイトの名前はおぼえた。だからホームルームの時間を使って、このまま席がえをすることになった。

今わたしがすわっているのは、窓際の前から二番目の席。前には穂村くんがいてきんちようするし、そのせいで間宮さんにこわい顔をされることもあるから、目立たない席にうつれるとうれしいな。

そう思っていたんだけど……

「あ、ありえない……」

ホームルームが終わると、わたしはだれにも聞こえないくらい小さな声でうなつて、机にた

おれこんだ。

ほつぺたを机にあずけてとなりの席を見ると、次の授業のじゅんぴをする宇都山くんがいる。少し首をひねって後ろの席を確認すると、穂村くんと目が合った。

穂村くんは、サラサラの黒髪をゆらしてにつこり笑う。さわやかなはずのその笑顔に、わたしはほつぺたを引きつらせた。

となりに悪魔、後ろに死神だなんて……

「こんなのありえないよ」

わたしは頭をかかえる。

「結城さん、大丈夫？」

心配そうに声をかけてくれるのは、前の席にすわる志葉さんだ。

「大丈夫。ありがとう」

「よかった」

顔を上げて答えると、志葉さんは口のはしから八重歯をのぞかせて笑った。

入学式の日、生徒会長の如月先ばいにイヤそうな顔をする志葉さんに牙が生えているように見えてドキツとしたけど、それはこの八重歯だったみたい。

「席がえで疲れただけ」

となりの席の宇都山くんがわたしを守ってくれている悪魔で、後ろの席の穂村くんがわたしの命をねらっている死神だなんて、ぜつたい言えない。

しかもふたりはすごく仲が悪いから、きつとこれから大変だ。

「たしかに、なかなかにぎやかな席がえだったもんね」

志葉さんが、さつきのことを思い出して笑う。

生島先生はくじ引きで新しい席を決めようって言ったんだけど、間宮さんたちのグループが、それだと不公平だから女子がとなりにすわる男子を指名した方がいいって、ちっとも公平じゃないことを言い出した。

当然、男子生徒からは、自分たちにも指名権がほしいって声が上がった。だけど、間宮さんが「そこはレディースファーストでしょう」と言い返した。

それなら好きな子のとなりにすわりたい子は、そのかわりに一番前の席になることにしてはどうかという意見も出たんだけど、それには生島先生が「先生の目の前を罰ゲームみたいにあつかうな」って、おこつちやつた。

それで最後は、やつぱりくじ引きで決めようってことになった。

わたしが引いた席は、窓際の後ろから二番目。

あまり目立たない席でホツとしていたのに、となりの席を宇都山くん、後ろの席を穂村くんが引いていておどろいた。

「間宮さん、めつちやこつちをにらんでるね」

志葉さんが、小さな声で言う。

志葉さんにかくれて前を見ると、こわい顔をしている間宮さんがチラリと見えた。ビクツと肩をはねさせて、わたしは体を小さくした。

「うう……」

「結城さんの席、いろいろデンジャラスだね」

志葉さんが、わたしの肩をポンポンとたたいてなぐさめてくれる。顔を上げると、八重歯をのぞかせてニカリと笑ってくれた。

入学式の日になつと苦手かと思つたから今まで話してなかつたけど、由衣ちゃんが言つてたとおり、志葉さんは明るくていい子みたい。

「志葉さん、仲よくしてね」

わたしが両手を組んでお願いをすると、志葉さんは「もちろん」つてうなずいてくれた。

「ありがとう」

新しい席はぎんちようしちやうけど、新しいお友だちができたのはうれしい。

志葉さんのおかげで元気が出たわたしは、体を起こして次の授業のじゅんぴを始めた。

四限目は体育の授業。

更衣室でジャージに着がえていたら、「鈴香ちゃん」つてうなるよう声が聞こえてきて、後ろから肩をつかまれた。

見ると、すでにジャージに着がえた由衣ちゃんが立っていた。

いきなり声をかけられておどろいたけど、体育の授業は由衣ちゃんのクラスといっしょだから、由衣ちゃんが更衣室にいてもふしぎじゃない。

「由衣ちゃん、ちよつと待ってね」

「ダメ！ 待てない」

由衣ちゃんは、制服をたたもうとしたわたしの手をつかんだ。

その目は、キラキラがやいている。

つつきり、いっしょに体育館に行こうつて声をかけてくれたと思つただけど、なんだかち

がうみたい。

「席がえのこと聞いたよ。やつぱり鈴香ちゃんの、運命の恋は始まっているんだね」

由衣ちゃんがうつとりと言う。

「う、運命って……。ただの偶然だよ。くじ引きで、たまたまふたりと近くの席になっちゃっただけ」

わたしは、あわてて説明する。

「そんな偶然、ありえないよっ！」

由衣ちゃんは、ガツポーズで断言する。

たしかに、宇都山くんも穂村くんも普通の人間じゃないから、何かふしぎな力を使ってわたしの近くの席にしたのかもしれないけど……そんなこと言えないし。

それなのに由衣ちゃんは、「どつちが運命の王子様なの？」なんて聞いてくる。

イケメンと恋バナが大好きな由衣ちゃんは、わたしに少女マンガのヒロインみたいな運命の恋を押しつけてくる。

だけどわたしは、恋なんてよくわからない。かわいい女の子からよく告白されている宇都山くんも、わたしのことなんて別になんとも思っていないと思う。

宇都山くんは優しいから、わたしを守ってくれているだけなんかも。

それにわたしを殺そうとしている穂村くんが、運命の王子様なんてこともありえない。

「どつちもちがうから」

「またまた。宇都山くんも穂村くんも、鈴香ちゃんを特別だっと思っているのに」

そんなことを話していたら、少しはなれた場所に着がえている間宮さんと目が合った。

こんな話を聞かれて、この前みたいによび出されたらどうしよう。

あの時は宇都山くんが助けてくれて、次の日に穂村くんが転校してきて、なんかうやむやになっただけ。

そんなことを考えてドキドキしていると、志葉さんがヒョコツと横から顔を出して言う。「偶然だけど、ふたりとも近い席なんてすごいよね。だから仲よしの結城さんのところに遊びにきたら、自然と宇都山くんたちとおしゃべりできるよね」

志葉さんの言葉に、由衣ちゃんの腫かかがやく。

「そうだよねっ！」

うれしそうな由衣ちゃんの声を聞いて、間宮さんもハツと目を大きくした。

その顔には「しまった」と書いてある。

そんな間宮さんの反応を横目でうかがって、志葉さんは、由衣ちゃんに言う。

「宇都山くんたちと仲よくしたいなら、わたしは、となりの席の子にじわるしたりしないで仲よくするな。普通に考えて、宇都山くんたちだって、いじわるな女の子より、明るくて優しい女の子の方が好きだと思っし」

ハキハキと話す志葉さんの声は、間宮さんにも届いているはず。っていうかたぶん、間宮さんに聞かせるために言っているんだと思っし。

その証拠に、間宮さんがわたしに向ける視線が急にキラキラし始めた。

「同じ小学校だった岸里さんだよな？ わたしも結城さんの前の席だから、遊びにきてね」

志葉さんに笑いかけられて、由衣ちゃんが大ききうなずく。

「そうするね。運命の恋に友だちのサポートはかせないから、がんばるね」

「だから、ちがうってば」

そうツツコミを入れたのに、由衣ちゃんは聞いてない。にぎりこぶしで、勝手に何かを決意している。

「そんなことより、早く体育館に行こう。今日の体育、バスケットだつて」

バスケット部で活躍している志葉さんが、わたしたちを急かした。

由衣ちゃんと志葉さんと三人で体育館に行くと、先に来ていた子たちがバスケットボールで遊んでいた。

「今日は男女混合だよな？」

「男女混合で、経験者と未経験者でグループ分けするって、先生が言ってたよ」

由衣ちゃんの言葉に、志葉さんが答えた。

広い体育館の真ん中に、ネットのカーテンが引かれている。それで二つのグループに分けて授業をするみたい。

「岸里さん、ちよつと手伝って」

「はい」

由衣ちゃんは同じクラスの子によばれて、そっちに合流した。

「先生来るまで、わたしもまぜてもらってくる」

志葉さんはそう言っつて、男子のグループの方に走っつていった。

「え、志葉さん？」

わたしが止める間もなく、いきおいよく走っつていった志葉さんは、そのまま男子だけのグ

ループにまぎってバスケットを始めた。

小がらな志葉さんが男子にまぎるのは、あぶなくないかな？

パスされたボールをドリブルして走り回る志葉さんの姿を見て、すぐにその心配は必要ないんだってわかった。

志葉さんは足が速くてすばしっこい。小さな体をいかして、右に左に相手をかわしていく。その動きは、全身がバネでできているみたいに俊敏だ。

「すごい！」

「何見てるの？」

ネットのカーテンの前にすわりこんで志葉さんの活躍に見とれていたなら、頭の上から声がふつてきた。

顔を上げると穂村くんがいて、ビックリした。

「ポケットにミウがいるよ」

前はよごれたらかわいそうだと思つて、体育の授業中はミウを制服のポケットに入れたままにしていた。けど、そのせいで穂村くんに殺されかけたから、今は体育の時間も連れ歩いている。

思わず口からこぼれたわたしの言葉に、穂村くんがイヤそうに顔をしかめた。

「心配でわかるよ」

そう言つて、穂村くんも床にすわる。

わたしがビックリと肩をはねさせたら、穂村くんはやれやれつて顔をする。

「宇都山くんが近くにいる間は何もできないから安心していいよ。下手したら、僕の方が殺されちゃうもん」

「うん」

わたしは理科室での出来事を思い出す。

宇都山くんにつかまれた穂村くんがすごく苦しそうな顔をした時、死んじやうんじやないかって心配になった。やつぱり、本当にそうなってたかもしれないんだ。

だとしたら、宇都山くんのためにも穂村くんのためにも、止めることができてよかった。

「宇都山くんはただの気まぐれで結城さんを守っているだけみたいだから、そのうちいなくなる。だから僕は、その時を待つことにするよ」

「え？」

穂村くんに思わぬことを言われて、わたしはまばたきをした。

そんなわたしの様子を見て、穂村くんは「そんなことも知らなかったの？」ってあきれてる。「だって、もし本当に僕に結城さんをあきらめさせたいなら、もつとちがう方法がある。それをしないってことは、そこまで結城さんのことを特別に思っただけのことだよ」

「……」
「だから宇都山くんは、そのうち結城さんからはなれる。しかたないから、それまではおとなしくしているつもりだよ」

わたしは見えない手で頭をたたかれたような気分になった。

そう言えば前に宇都山くんも、穂村くんをあきらめさせる方法があるって言っていた。

どういう方法なのか教えてっってお願ひしたわたしを、宇都山くんは「秘密」って言っただけで済んだ。

あの時は宇都山くんの笑顔にドキドキして、それ以上聞くことができなかつた。だからそれが、どんな方法かわからなかつた。

だけど穂村くんの話から考えると、それはすぐ特別な相手にしか使わない方法みたい。

宇都山くん、わたしのこと特別な存在だっって言っただけなのに、そうじゃなかつたのかな？
そう思っただけなら、なんだか胸がモヤモヤする。

「オイッ」

宇都山くんにとつて、わたしはどんな存在なのかなつて考えていたら、また声があつてきた。見上げたら、こわい顔をした宇都山くんが立っただけで、びっくりした。

「宇都山くん」

宇都山くんはわたしの声を無視して、穂村くんをにらむ。

「何コイツに話しかけてんだよ」

穂村くんは、小さく肩をすくめて立ち上がった。

「クラスメイトとして、仲よくおしゃべりしてただけだよ」

穂村くんが『仲よく』の部分強調して答えると、宇都山くんはすぐイヤそうな顔をした。そんな宇都山くんの顔を見て、穂村くんはちよつといじわるな顔をして笑う。

ふだんは優しくさわやかなのに、穂村くんは宇都山くんだけに、いつもちよつと態度が悪い。
悪い。

宇都山くんが穂村くんに対して態度が悪いのも、いつものことだけだ。

「死神のくせに、気安く話しかけるな」

「口うるさい悪魔だな。結城さんは、きみのものじゃないだろ」

おたがいに『死神』『悪魔』つてよびあうふたりに、わたしはハラハラしてしまふ。

でもまわりはみんな、それぞれにバスケやおしゃべりに夢中で、こちらの話を聞いてないみたい。

そのことにホツとしていると、穂村くんが言う。

「結城さんを自分のものにする気がないのに、ただの気まぐれでジャマされるとめいわくだ

よ」

穂村くんのその言葉に、宇都山くんは何も言い返さない。

だまって奥歯をかむ宇都山くんの横顔を見て、わたしは胸がいたくなる。

だつて言い返さないつてことは、それが正解だつてことだよな？

「おい、授業始めるぞ」

わたしがひとりすわつたままで宇都山くんを見上げていたら、体育の先生が入ってきた。

「授業だぞ」

それだけ言つて、宇都山くんは集合の輪にかけていく。

穂村くんも、わたしにバイバイつて手を振つてその後続いた。

「結城さん、どうかした？」

入れかわりで戻つてきた志葉さんが、わたしの顔を見て目を丸くした。

「え？」

「なんか、顔色悪いよ」

そう言われて顔をさわつてみたけど、自分ではよくわからない。

でもきつと、あまりいい顔色はしてないと思う。

だつて、宇都山くんがわたしを守ってくれているのは、ただの気まぐれなんだつてわかつちやつたんだもん。

それつて、かなりシヨックだ。

3・如月先ぱいとナイシヨのおしやべり

もうひとりの体育の先生も来て授業が始まると、体育館は女子の歓声に包まれた。

「穂村くん、がんばって！」

「宇都山くん、まけないで！」

「ぎゃー！ ふたりともカッコイイ！」

五人ずつのグループを作ってクラス対抗戦をしているんだけど、自分の出番じゃない子はみんな宇都山くんと穂村くんの試合に声援を送っている。

クラス対抗戦のはずなのに、同じチームの穂村くんと宇都山くんは、なぜかおたがいのボールを取り合っていて、かなりめっちゃくちやだ。

穂村くんがドリブルで運んでいたボールを宇都山くんが横からカットして、自分の手でシュートを決めた。そうしたら今度は、宇都山くんがスリーポイントシュートを決めようとしたボールを、高くジャンプした穂村くんがうばって、自分でシュートする。

そんなふたりの戦いに、敵だけじゃなくて、味方チームの人でも手出しできない。

最初は注意していた先生も、あきれているような、感心しているような顔で、ふたりのバトルを見守っている。

「次、結城さんと、岸里さんのグループの対戦だよ」

ホイッスルの音がひびいて、別のコートで試合をしていた志葉さんが戻ってきてわたしに言う。

「そうだった」

「がんばってね」

立ち上がったわたしは、入れかわるみたいにしてすわった志葉さんに聞く。

「志葉さん、バスケットじゃうずだね。小学校の頃からやってたの？」

志葉さんは入学してすぐ、バスケット部の練習に参加しているって聞いたし、さつきも、すごいきびんに動いていた。

「うん。小学校の時からミニバスやってた。アニキとバスケットで遊ぶこともあるし」

そういえば由衣ちゃんが、志葉さんのお兄さんのこと、『こわいけどカッコイイ』って話した。

でも小がらでかわいい志葉さんを見ていると、
こわいお兄さんなんて想像できないな。

「ピュッ」

先生がホイッスルを鳴らしてボールを高く上げると、由衣ちゃんが指先でそれをはじいた。

でもコントロールができてなくて、はじいたボールがわたしたしの方へ飛んでくる。

「キャッ！」

おどろいたけど、わたしはどうにかそれをつかち取る。

そのままボールをドリブルで運ぼうとした時、「結城さん、がんばって」って女子の声援が聞こえた。

ビックリして声のした方を見ると、間宮さんがブンブン手を振ってわたしを応援してくれている。

どうやら、さっきの志葉さんの話を聞いて、考え方が変わったみたい。

もしかしたら間宮さんは、こわい人なんじゃなくて、ビックリするくらい自分の気持ちに正直なだけなのかもしれない。

休み時間のたびににらまれるよりずっといいけど、これはこれで恥ずかしい。

そんなことを考えていたせいか、わたしは足をもつれさせて体のバランスを失った。

「あつ！ キヤアツ」

悲鳴といつしよに、わたしの体が床をころがる。

たおれたいきおいで手からはなれたボールを相手チームの子がひろい上げて、そのままシュートする。

「ピュッ」

ゴールを知らせるホイッスル音に、わたしはやってしまつたと顔をしかめた。

「結城さん、大丈夫？」

先生がかけよつてきてわたしに聞く。

「大丈夫です」

そう言つて顔を上げると、先生が「あつ」て顔をしかめた。

「……？」



どうしたんだろうって思いながら体を起こすと、先生がわたしのおでこをさわった。先生の冷たい手がふれると、おでこがズキンといたんだ。

「保健室に行った方がいいわね」

先生にさわられている感じで、おでこにたんこぶができているんだろうなっつてわかる。

「ひとりで行く？」

先生の質問に「大丈夫です」つて答えて、わたしは立ち上がった。

後ろの方でだれかが「結城さん、体育苦手だよね」つて話しているのが聞こえた。

わたしが苦手なのは、注目されることなのに……

体育館を出て校舎につながる渡り廊下を歩いていたら、「あれえ？」つて明るい声が聞こえてきた。

声のした方を見ると、渡り廊下の外から、色白で、金色の髪を外はねにして遊ばせている西風の顔立ちをした男子生徒がヒラヒラ手を振っている。

生徒会長の如月先ばいだ。

「君、どうしてここにいるの？」

如月先ばいがふしぎそうに首をかしげるので、わたしはかけよる。

「保健室に行くところですよ」

授業中に歩いていることを注意されているんだつて思つてそう話したら、如月先ばいはビックリすることを使う。

「そうじゃなくて、君、まだ生きてたんだね」

如月先ばいは笑顔でそんなことを言うけど、そんなの、とつぜん人に言うようなことじゃないよね。

「えっ！」

如月先ばいの言葉に、わたしは、病院の爆発事故のことを思い出す。

あの日、宇都山くんが助けてくれなかつたら、わたしはあそこで死んでいた。

もしかして如月先ばいは、そのことを知っているのかな？

そういえばあの日、如月先ばいに話しかけられたはずなのに、何を話したのかぜんぜんおぼえていないのは、どうしてなんだろう？

そんなことを考えていたら、如月先ばいは、わたしに顔を近づけてスンと鼻を動かす。おいをしつかり確かめるために目を閉じているから、まぶたにうつすら残る二重の筋や、

女のひとみに長いまつ毛がハッキリ見えてドキツとする。

それに白い肌はキメが細かいし、明るい色の髪もサラサラでかがやいていて、本当にモデルさんみたい。

由衣ちゃんがいたら、大きすぎしそう。

「あの……会長さん……？」

ドキマギして声をかけると、如月先ばい目が目を開けてわたしを見た。

普通ならありえない距離で青い瞳に見つめられて、わたしはビックリして数歩後ろに下がった。

そんなわたしを見て、如月先ばいはニツと笑う。

「生きているってことは、蓮斗さんと契約したのかな？ 君は蓮斗さんのお気に入りっぽい。

それなら僕は……」

「契約ってなんですか？」

そう聞いたなら、如月先ばいは、メガネの下の目を丸くした。その顔には「しまった」って書いてある。

これはぜったい何かある。

「契約って、なんのことですか？」

もう一度聞いてみた。

「秘密です。僕からは何も言えません」

如月先ばいは、ニコニコしながら口の前で指を左から右へと動かす。

お口にチャックをしめるマネをして、その後は知らん顔。きつとわたしには話せないことなんだ。

でもそんなことされると、よけいに気になる。

「会長さん、契約って……」

しつこく質問をしようとした時、遠くからわたしの名前をよぶ声があった。声があった方を見ると、宇都山くんがこつちに走ってきている。

「ゲツ」

宇都山くんに気づいた如月先ばいがうなる。

そしてわたしの手をにぎって「今の話、ぜったい秘密にしてね」ってお願いして、どこかに走っていった。

「アイツと、何を話していたの？」

かけつけた宇都山くんが、ちょっとこわい顔でわたしに聞く。

「えつと……」

前に宇都山くんが穂村くんを苦しめていた姿を思い出して、わたしは言葉のみこんだ。

秘密にしてつてお願いされたことを話して、先輩が宇都山くんにおこられたら悪いよね。

わたしがだまっていると、宇都山くんがため息をついた。

「あぶないからアイツには近づくなつて、前に言ったのに」

たしかに、そんなことを言われた気がする。

あれは穂村くんが転校してくる前の日だよ。

宇都山くんは前髪をかき上げてもう一度ため息をつくとき、わたしの手をつかんだ。

「えっ!？」

とつぜん手をにぎられてビックリしたわたしに、宇都山くんは「結城さん、ひとりにしておくと危険だから」なんて言う。

そしてそのまま、わたしの手を引いて歩き出した。

4・宇都山くんは小悪魔

宇都山くんといつしよに保健室に行くと、わたしの顔を見て、保険の先生はおどろいた顔をした。

「あら大変。ひやした方がいいわね」

そう言つて保健室に置いてある冷凍庫の扉を開けた先生は「あら、やだっ!」つて高い声を上げた。

「保冷剤がちやうどないわ。職員室の冷凍庫にもあると思うから、少し待っていてね」

それだけ言つと、先生はわたしと宇都山くんを保健室にのこして出ていってしまった。

「わたし、そんなひどい顔をしているかな?」

保健室には流し台があつて、その前に鏡がある。

その鏡をのぞきこんで、わたしは「うっ」て顔をしかめた。

右のおでこが赤くはれている。

「これ、目立つ？ 顔、変だよね？」

いたみより、それが気になる。

答えてほしくて、右どなりにいる宇都山くんを見た。

でも流し台にもたれかかっている宇都山くんはわたしの質問には答えずに、ぜんぜん関係ないことを聞いてくる。

「さつき、穂村と何を話してたの？」

「えつと……」

体育の授業が始まる前に穂村くんと話していたことを思い出したら、少しだけ胸がいたくなつた。

だって穂村くんと話して、宇都山くんがわたしを守ってくれているのは、ただの気まぐれなんだってわかっちゃったんだもん。

でもそんなこと、宇都山くんには言えない。

「なんか元気がないから、アイツに何か言われたのかなって……」

宇都山くんは優しいから、わたしが落ちこんでいることを気にしてくれていたんだ。でもその優しさも気まぐれだっと思うと、すなおに「ありがとう」が言えなくなる。

わたしが宇都山くんを『特別』って思うのと同じだけ、宇都山くんにもわたしのこと『特別』って思っほしいなんて、ただのわがままだよ。

だからわたしは、だまって首を横に振った。

でも宇都山くんは、ちよつと納得してはいないみたい。

首をすこしかたむけて、わたしの顔をのぞきこんでくる。

近くで見える宇都山くんは、黒い髪も肌もつやつやで、二重のキリリとした目も形がいい。

いつもふきげんそうにしているも、女子に人気だっというのにもよくわかる。

だから、宇都山くんが一番の特別な存在になりたいなんて言えないよ。

本当は、どこにも行かないですつといっしょにいてっってお願ひしたいけど。

「宇都山くん、一つ聞いてもいい？」

「何？」

「前に、穂村くんにわたしのことをあきらめさせる簡単な方法があるって言っつたよね？」

穂村くんと宇都山くんの正体を知った日、わたしを家まで送ってくれた時に、宇都山くんがそんなことを言っつていた。

あの時は『秘密』ってほぐらかされちゃったけど、いつか宇都山くんがいなくなつちゃうん

なら、その方法を知っておきたい。

そう思ったのに、わたしの質問を聞いた宇都山くんは、くちびるを引きむすんで遠くを見た。ふきげんそうな横顔に『絶対に教えない』って書いてある。

「その方法は、結城さんには必要ないから教えないっ！」

その強い言い方をされて、わたしの心臓がギュツといたくなる。

きつと、わたしが宇都山くんにとつて、そこまで特別じゃないから話したくないんだ。

「……」

泣きそうになって下を向いたら、ミウがポケットから顔を出した。

わたしと宇都山くんを見比べて、心配そうに鼻をヒクヒクさせる。そんなミウを見て、わたしは宇都山くんに聞きたいことが他にもあったことを思い出した。

「あ、そうだ。ミウのごはんって、何をあげたらいいの？」

「え？」

「ハリネズミ用のフードをあげてみたんだけど、食べてくれなくて」

ポケットから顔を出していたミウを手をひらにのせて聞く。

インターネットで調べたら、ハリネズミは虫なんかを食べるって出てきた。

わたしは虫が苦手だから、それはちよつとむり。

だからかわりにペットショップでハリネズミフードっていうのを買ってきて、あげてみたんだけど食べてくれなかった。

「こいつのエサ？」

宇都山くんが、わたしの手に顔を近づけてミウを見た。

羊毛フェルトのマスコットだったミウは、宇都山くんに命をもらって生きているから、まばたきもするし、口には牙もある。

だからご飯を食べさせてあげたいんだけど、ミウはちつとも食べてくれない。

「そうなの。食べなくても元気なんだけど……」

ミウは使い魔だから、ご飯を食べなくても平気なのかもしれない。

でもずっと何も食べないでいると、本当に大丈夫なのかなって心配になる。

宇都山くんに見つめられて、ミウはわたしの手の上で前足を上げて何かをうったえている。宇都山くんには、ミウの言っていることがわかるのかな？

しばらくミウを見ていた宇都山くんは、姿勢を起こしてわたしを見た。

「使い魔に食事は必要ないよ」

宇都山くんの返事を聞いたミウは、「両方の前足を上げたまま動きを止めた。そのままの体勢で、首をひねってわたしを見る。

なんだか目がウルウルしているように見えるけど、気のせいかな？

もしかしたらバンザイをして、宇都山くんに「元氣だよ」ってアピールしていたのかもしれない。

なんだかよくわからないけど、元氣でよかった。

「結城さん」

ミウの頭をなでていたら、宇都山くんに名前をよばれた。

「何？」

ミウをポケットに戻して顔を上げると、宇都山くんの手がわたしの左のほつぺたにふれた。

宇都山くんの冷たい手の感触に、ドキッと心臓がはねる。

そのすきに、宇都山くんはちよつと首をかたむけて、わたしの右のおでこにキスをした。

「——っ!？」

う、宇都山くんにキスされている！

とつぜんのにびつくりして動けないしていると、宇都山くんは、聞き取れない言葉をとな

えた。

■——▽※◇

そして顔を上げると、ニツと笑う。

その笑い方はちよつといじわるで、それでいて、わたしをドキドキさせる。

「結城さんの顔、変じやないよ」

そう話す宇都山くんの瞳の奥で、赤い光がゆれている。

溶岩を思い出させるその光に見とれていると、宇都山くんはバイバイって手を振って保健室

を出ていこうとする。

その時ちよつど保健室の先生が戻ってきて、宇都山くんは「先に授業に戻ります」って言うて、入れかわるみたいにして保健室を出ていった。

「待たせてごめんね」

そう言うてかけよつてきた先生は、わたしの顔を見て、ふしぎそうな顔をする。

「あれ？ はれてないわね」

「え？」

先生の言葉におどろいて鏡を見ると、おでこのたんこぶが消えていた。